ちょっといい話

～ 南無と加持 ～

南無はお釈迦様の時代 namas,namo,と帰依する意味に使われ、動作としては敬意を表す爲に相手に対して腰を曲げて頭を下げる事であり、要するにナマステと言いながら手を合わせてお辞儀をしていたのです。南無阿弥陀仏は第 10 号を参照して下さい。教えも色々あります、例えば法然上人や親鸞等は浄土教であり、弘法大師や最澄等は密教であり、釈尊などは顕教等と言われておりますが分け隔てをする必要はありません。此の世の生活様式と同じで教えにも色々道はあるのです。密教でとても大切になるのが加持です。弘法大師の「即身成仏義」に因れば、加持とは、如来の大悲と衆生の信心とを表す。佛日の影、衆生の心水に現ずるを加と言い、行者の心水よく佛日を感ずるを持と名ずくと説かれています。即ち、佛から我々衆生に対する働きかけを加と言い、行者が佛からの働きかけを受け止め持する事を持と言っております。現在では加持祈祷と言っており、一般の方は、お加持＝祈祷と思ってみえます。それはそれで結構です。如来の大慈大悲は信心の深さによって我々が受け取れるか、受け取れないか決まってしまうのです。要するに、如来の智慧を戴には信心が基本ですよと弘法大師も説かれたのです。それで弘法大師自身は加持＝即身成仏を実践されたのです。私達は信心堅固に生活をする事が益々困難になると予測されます。それ故に、密教の自力と足りないところを浄土教の念佛他力に、おすがりするのです。第 24 号にて取り上げました心について、大切なのでもう少しお話し致します。毎月 3 回善入院では般若心経を読誦し信仰の向上に努めています。心経はその名前のとおり心のお経です。心は丸いのか、赤いのか、決まった形も無ければ、色も無い、胸にも頭にも無い、そうです決まったところには無いのです、しかし心は存在する。水が器にしたがって、その姿を変える如く心もその姿を変えるのです。第 19 号の「六根」眼、耳、鼻、舌、身、意の感覚能力と知覚能力を支配する中枢にあるのが心であります。菅原道真公は「心だに真の道に、かないなば、祈らずとても、神や守らん」と言われました。我々には 108 の煩悩が与えられております。煩悩即菩提ともありますが、我々は心の消しゴムで煩悩を一つずつ消して行きたいものです。

善入院油掛地蔵尊